

英語教育に活用するモジュール型教材の可能性¹

(The Possibility of Using Modular-style Teaching Materials in English Education)

—英文法の学習を中心にして—

(Focusing on the English Preposition *At*)

花崎 一夫² (Kazuo Hanazaki)

花崎 美紀³ (Miki Hanazaki)

藤原 隆史⁴ (Takafumi Fujiwara)

Abstract

Recently a special emphasis has been placed on the importance of English education and producing globally-competitive human resources, but English proficiency of the Japanese college students has deteriorated in reality. Judging from the current state of affairs, it might be better for the Japanese college students to take more English classes in order to improve their ability in English, but considering the requirements necessary to complete their curriculum, they find it harder to learn more English in classroom than they do now because of the time constraint. In this paper we will introduce the modular-style teaching materials which are offered on the e-learning system called e-Alps platform we are using at Shinshu University and argue that they enable the students to learn English outside classroom in order to overcome the problem of limited learning hours in English classroom. These materials are posted on e-Alps and our students can download them freely. We especially focus on the material concerning the English preposition *at* in this paper because English prepositions are generally considered to be difficult to handle for EFL students and argue for the advantages of adopting this kind of material in English education for Japanese college students.

Keywords: e-learning; modular-style teaching material; English education; Preposition; AT

1. はじめに

昨今、大学において、グローバル人材の育成が重要なテーマとなっている一方で、大学生の英語力の低下が問題となっている。ところが、必修科目として英語の授業にさける時間は、従来よりも限定される方向に向かっているのは避けられない事実となっている。このような流れの中で英語力の向上を図るためには、授業外での英語学習が急務になってくる。我々が所属する信州大学においては、自学自習用教材としてアルクネットアカデミー2を導入し、英語の基本的な聴解力ならびに読解力の養成をはかつ

¹ 本稿は、信州大学の研究者補助制度の支援を受けて作成しており、モジュール教材の作成補助として、信州大学4年生の伊東勇人氏の協力を得ている。

² 信州大学全学教育機構 School of General Education, Shinshu University

³ 信州大学人文学部 The Faculty of Arts and Humanities, Shinshu University

⁴ 信州大学人文科学研究科 英語学専攻 Division of Arts, English linguistics major

ているが、英語の基礎力が十分でない学生に対して、基礎的な文法事項を中心とした指導も実施している。具体的には、学習者が授業外でも自学自習できることを目的とした自学自習用教材を、重要な文法項目ごとにモジュール型教材として作成し、それを大学における英語教育に活用している。作成した教材は授業外で自由に活用できるよう、信州大学の e-Learning 学習のポータルサイトの e-ALPS 上に掲載し、学生が必要な時にはいつでもダウンロードし、学習に取り組めるようになっている。このモジュール型教材は、認知言語学の知見を応用し、学習者の「なぜ」という疑問に答えるように配慮されており、従来型の英文法の教材とは一線を画したものになっているのが特徴の一つである。本稿では、英語学習者が習得に困難を感じる文法事項の一つである前置詞をテーマに取り上げる⁵。というのも、一般的に言って前置詞は多義で、英和辞典の用例を見ているだけではその習得は難しいということは自明であり、その前置詞の学習を容易にすることが英語力の向上への近道であると、我々教育者も確信しているからである。本稿ではとりわけ前置詞 at について第 2 節で考察し、at のモジュール型教材のベースとなる考え方について解説し、第 3 節では、前置詞 at のモジュール型教材に言及しながらモジュール型教材の特徴を概観し、その有効性について議論する。第 4 節は結語である。

2. 前置詞 at の意味論⁶

2.1 先行研究

前置詞 at には非常に多くの用法があることはよく知られた事実である。つまり、at の守備範囲は非常に広い。この広い守備範囲をどう考えるかに関し、先行研究には、at に「点」という中心義を設定する立場と、そうしない立場の二つの流れが認められる。

(1) 先行研究の大きな 2 つの流れ

(a) 中心義：点

(Hill (1969)ⁱ, 小西 (1976, 1997)ⁱⁱ, Herskovits (1986)ⁱⁱⁱ, Dirven (1994)^{iv}, 小寺・小延 (2001)^v, 森山 (2010)^{vi}, 田中(2011)^{vii}, 安藤(2012)^{viii})

(b) その他

(Rauh (1994)^{ix}, Hawkins (1994)^x, Lindstronberg (1997)^{xi}, Hanazaki & Hanazaki (2008)^{xii}, 花崎 & 花崎 2009)^{xiii})

例えば、安藤(2012)では、at は(2a,b)のように基本的には場所・時間の<一点>(point)を表すとし、それ以外のものは独立した用法として認めていく、というアプローチを取っているが、それが標準的な見方と言って差し支えないだろう。

(2) a. She called at my house on her way home. (場所の一点)

b. There's a meeting at 2.30 this afternoon. (時間の一点)

c. I bought these books at a dollar each. (目盛りの at)

d. I stole a glance at the girl. (目標の at)

e. France was then at war with Germany. (状態の at)

f. I was surprised at the news./ She wept at the sight of his misery. (原因の at) (以上、安藤 (2012))

Dirven (1994)は、at の中心義は空間における Orientation Point であり、時間用法やその他の用法をそこ

⁵ ここでは英文法概念を広義に捉え、前置詞も英文法の学習項目の一つと考えている。

⁶ 第 2 節は加藤・花崎・花崎 (2015) の内容に基づき、それに加筆、修正を加えたものである。

からの転用としている。また Hawkins (1994)は、at によってプロファイルされるのは COINCIDENCE という関係であり、2つのモノが一つの物理的空間を占めて存在している状態を at を使って表すと考えている。このように、at の用法に関する先行研究では、「点」を中心義とするかどうかはともかく、何らかの中心義を設定し、それ以外の用法をそこからの転用と考えるというところは一致している。

しかし、そのようなアプローチでは、例えば(3a)のような「...を聞いて」の用法は、空間的な用法からはかなりの隔たりがあり、したがって空間用法からそれらの用法を導き出すことには無理があるように思われる。⁷

(3) 先行研究で扱えない事例

a. be surprised at the news

b. beautiful shot at goal

このような事例は、従来のアプローチでは at の用法を十分説明することはできない、ということ強く示唆している。そのため、ここでは、ある特定の用法を中心義とする、というアプローチは取らない。以下、at の意味は、at の全用法に共通する概念である<特定>であるとし、個々の用法は、その<特定>が置かれる文脈によって決定される、という提案をする。このアプローチにおいては、個々の用法を導き出す文脈が何であるのかを明確に述べるのが中心課題になる。英語学習者は、このような立場に基づいて作成された教材を用いて学習することにより、より効率的に前置詞の学習が可能になり、最終的に英語力の向上にもつながることが期待される。

2.2 代案

2.2.1 At の意味

(6) 本稿が提唱する At の語彙的意味

[PP at NP]において、at は、「ある意味領域において指定されるべきものが NP である」という意味を持ち、かつそれ以上の語彙的意味を持たない

at の意味：<特定>

(6)の意味規定は長くて不便であるため、本稿では、以下、at の意味は<特定>であるという言い方をしますが、それは(6)の内容を一言で表現したものである。

(6)が言うところは次のような内容である。(7)から(9)は事実上同じ事象を記述した文である。このうち、(7)は、beach を「表面を持つもの」として見た場合の言い方である。それは、on がその目的語として表面を持つものを要求するからである。(8)は、beach を領域として見た場合の言い方である。それは、in がその目的語として「中と外を区別できる形」つまり二次元または三次元の領域を要求するからである。このように、in と on はその目的語の形を決めていると言える。(9)についてはすぐ後で検討する。

(7) There are so many young people on the beach. 「表面を持つもの」

(8) There are so many young people in the beach. 「中と外を区別できる形」

(9) There are so many young people at the beach.

⁷ 動詞 shoot と at が共起すると、「ねらって撃ったが外れる」という意味になる。しかし shoot を名詞にした(3b)では、動詞の場合と違って「外れない」という解釈が可能になる。先行研究のアプローチでは、この用法の at に対しては「ねらうが、動詞と共起する場合は外れ、名詞と共起する場合は当たるか外れるかは分からない」という意味を持つものとして記述せざるを得ないように思われる。

(7)と(8)で前置詞がやっていることをまとめておこう。

(10) 前置詞はその目的語の形を規定する

それでは、(9)では at は何をしているのだろうか。In と on を使うことができる環境で、(9)ではあえてそれらではなく at を使っている。(6)を主張する本稿の立場では、at がしていることは(11)であり、at の特徴は(12)であるということになる。

(11) (9)で at が表示していること

ここでは the beach の形状は問題になっておらず、at は直後に来る<場所>が何であるかを特定する役割のみを果たしている

(12) at の特徴 1

at の意味論的特徴は、他の前置詞と違って、目的語の形を規定しないところにある

ここでもう一度 at の例(9)を考えてみよう。上で確認したように、at は、その目的語の形を規定しない、という特徴がある。それを踏まえた上で at を考察すると、(9)で at がしていることが(13)であることが分かる。

(13) at の特徴 2

at は、何かと at の目的語との位置関係しか表示せず、かつその位置関係とは、「その何かの位置が at の目的語である」である

(13)は(12)の特徴をその中に織り込んでいえる。そして(13)は、(6)を日常的な言葉で言い換えたものである。(6)で言う「ある意味領域において指定されるべきもの」は、(9)においては<位置>である。

At の語彙的意味は「点」であるとされているが、(6)、もしくはその言い換えである(13)は、ここまで見てきたような<場所>、あるいは It starts at 9:30.のような<時刻>に関しては等価である。「点」とする立場では、at の目的語が空間もしくは時間軸上で「点」として捉えられているという理解になり、(6)の立場では、「ある意味領域において指定されるべきもの」が<位置>もしくは<時刻>である、という理解になる。では、at の中心義を「点」と考えない方が妥当であるのはなぜなのか、について次のセクションで考察することとする。

2.2.2 「比喩」に代わるものとしての「特定」

これまで見てきた例では、at の意味を(6)のように考えるのと、「点」であると言うのとでは大きな差はない。しかし、次のような事例では、「点」であるとする立場では、「その用法は『点』の比喩的用法である」と言わなければならない。

(14) You can reach us at 03-3295-6231. (ジーニアス)

(15) Visit our web site at www.taishukan.co.jp. (ジーニアス)

これらの例に対し、「点」とする立場では、「まず電話番号やウェブサイトが<場所>として捉えられており、更にその場所としての電話番号やウェブサイトが比喩的に「点」として捉えられている」というように、二重の比喩化を経ていると見なければならないことになる。一方、(6)の立場では、「この意味領域において指定されるべきものは<アクセス情報>であり、at はそれを特定している」というように、通常の場所表現と全く同じ仕方で解釈を与えており、そこには余分なステップはない。

次のような事例も、「点」とする立場では同じような説明をしなければならない。

(16) She excels at chess. (ジーニアス)

(17) She is good at (playing) golf. (ジーニアス)

すなわち、「点」とする立場では、「まずチェスやゴルフが<場所>として捉えられており、更にその場所としてのチェスやゴルフが比喩的に「点」として捉えられている」というように、二重の比喩化を経なければならない。一方、(6)の立場では、「この意味領域において指定されるべきものは<分野>であり、at はそれを特定している」というように、通常の場合表現と全く同じ仕方で解釈を与えており、そこには余分なステップはない。

なお、仮に at 自体に「巧拙の対象を表示する」という語彙的意味があると考えたとしたら、その場合には、例えば I am at Tokyo. で「私は東京が得意である／苦手である」という意味があってもいいことになることに注意されたい。(16)(17)では、実際には at は「巧拙の対象を表示」しているのであるが、それは、at 自体にそういう意味があるのではなく、excel という動詞や good という形容詞にそういう意味があるから、文全体が「何かの巧拙」という解釈になるのである。そこで at がしているのは、「何かの巧拙」の「何か」が何であるのかを<特定>しているだけと考えられる。以上の考察から、at の中心義を「点」とする立場では不必要な二重の比喩を持ち出さねばならず、これは英語学習者が前置詞の用法を習得する際の障壁になってしまうことが明らかになった。一方、at の意味を「特定」とする立場では、二重の比喩化のような余分なステップが不必要であるばかりでなく、at に「巧拙の対象を表示する」のようなアドホックな意味を想定しないですむことになり、英語学習者の負担も軽減されることになることも明らかになったと言える。

3. 前置詞 at のモジュール教材

昨今、信州大学を含めた日本の大学では、グローバル人材の育成に力を注いでいるところであるが、授業を通じた英語教育は縮小の方向に向かっており、大学生全体の英語力を見ても、向上しているとは言いがたい現状にある。そのような状況下で大学生の英語力の向上を目指すためには、今まで以上に授業時間外での学習が重要になってくる。そこで我々が考案したのが、英文法のモジュール型教材であり、以下の4つの特徴を備えている。(a) 学習を容易にする仕組み。(b) 学習者の関心を引く内容: 認知言語学の知見の活用。(c) 実際の運用を想定した英語の例文の選択。(d) 学習者のモチベーション向上のための仕掛け。以下のセクションでは、前置詞 at の教材を例として取り上げ、これらの特徴について概観する。

3.1 学習を容易にする仕組み

英文法の学習を容易にする仕組みとしてまず挙げられるのは、教材がモジュールスタイルになっている、すなわちモジュール型教材になっているということであり、それらの教材は、信州大学のイーラーニングシステムのプラットフォームである e-Alps にアップロードされており、我々の英語の授業を受講している学生であれば、自由にダウンロードして自学自習用として活用できるようになっている。⁸ また、モジュールごと、すなわち文法項目ごとに教材が提供されているということは、学生は必要な教材を必要な時に選択して学習することが可能になるということも意味している。

以下の図1は、英文法の項目が掲載されているページを含む e-Alps の抜粋である。我々は現在でも英

⁸ 現在のところ我々が提供している教材は、基本的には我々の英語授業の受講者が自由に閲覧できるようになっている。今後は、信州大学の学生全員が自由に閲覧できるようにしていくことを検討中である。

文法のモジュール型教材の作成を継続しており、少しずつ扱う文法項目を増やしているところである。



図1 e-Alpsの文法項目の掲載例

3.2 学習者の関心を引く内容：認知言語学の知見の活用

我々が教材を作成する際のベースとしている学問的基盤が認知言語学であることも、モジュール型教材の特徴となっている。認知言語学では、なぜある言語形式がそれに対応する意味や用法を持っているのかを、英語学習者にも理解しやすい言葉を使用して説明を試みている。したがって、必然的に、教材の説明は、英和辞典にありがちな用法をただ単に日本語訳しているために、結果的に学習者に用法を暗記させることを強いるのではなく、学習者にとっても理解しやすいものになるのである。前置詞 *at* の教材を例にとって説明すると、我々の作成した教材では、*at* のもつ様々な用法を、*at* の持つ「特定」という意味とそれが使用される文脈を、学習者にとってわかりやすい言葉を用いて具体的に提示することにより、多義である前置詞 *at* の学習を容易なものにしていると言える。図2が、*at* の教材からの抜粋である。

atの意味は「特定」

(9) You can reach us **at** 03-3295-6231. (ジーニアス)
 (10) Visit our web site **at** www.taishukan.co.jp. (ジーニアス)

atの意味を「点」とすると... 電話番号やウェブサイトが〈場所〉として扱えられる ↓ その場所としての電話番号やウェブサイトが比喩的に「点」として扱われている 二重の比喩化 ⇒ ややこしい!	atの意味を「特定」とすると... 指定されるものは <アクセス情報> atの後ろにはアクセス情報がくると考えれば良い!
--	---

atの意味って何？

I was surprised **at** the news. = I was surprised **by** the news.

「感情の変化」 → 変化を起こした要因がある(はず)
 文の意味内容は、「何かの**要因**で感情の変化が起こる」

受動態
↓
by

要因を**特定**する
↓
at

atの語彙的意味は**特定**

こう考えるとatの様々な用法が簡単に理解できます!

図2 Atの教材からの抜粋

3.3 実際の運用を想定した英語の例文の選択

言語学の中でも生成文法分野では、そこで扱う例文は、言語学者が作り出したものが多く、場合によっては非文を取り上げることで文法的な文との差異を説明することもあり、実際の言語運用とは乖離している場合が散見されるのであるが、我々が採用している認知言語学の分野では、扱う例文をなるべく実際に使われている英語から引用することが多い。そこで我々もこの点に留意し、取り扱う例文をCOCA(Corpus of Contemporary American English)やCobuildなどから抜粋し、なるべく実際に運用されている生きた英語を取り上げるようにしている。こうすることで、学習者が実用的な英語を習得し、運用することにもつながると確信している。そして繰り返しになるが、解説の中で、例えば前置詞 *at* がどのような状況で使われているかを文脈別に提示することで、教材を理解しやすいものになっていることも、英語の実際の運用を考えて行っていると言える。図3が *at* の教材からの抜粋である。

Atに原因の意味はあるのか？

(3) I was surprised **at** the news. 私はそのニュースに驚いた。
(4) *I almost vomited **at** the news. 「ニュースを聞いて吐きそうだった」という意味にはなりません。

at 自体に「見て、聞いて、知って」、つまり「原因」という意味があるとしたら、(4)も言えるはずだが...

(5) Still others vomited **at** the sight of a basketball court. (COCA)
「見て」が言語化されていなければならない。

(3)で、「見て、聞いて」という表現を用いないのはなぜ？



図3 *At* の教材からの抜粋

3.4 学習者のモチベーション向上のための仕掛け

4つめの特徴としてあげられるのが、それぞれのモジュール型教材には、それに対応する学習前テストと学習後テストが用意されているということである。学習前テストに取り組むことで、学習者は、当該の文法事項をどの程度理解しているのかを事前に知ることができ、学習の際には、自分が理解していない部分を重点的に効率よく学ぶことが可能になり、このことが学習者の学習の動機付けにつながる。また、学習後テストを用意することで、学習者はそのテストに向けて教材の学習に集中することが期待でき、その結果、当該の文法事項の確実な習得に寄与することにもなる。我々の担当する授業では、学習後テストを成績評価の一部に加味することで、学習者の理解度を測定するとともに、学生の学習意欲の維持向上に努めているところである。

図4が、前置詞 *to* と *at* に関する学習前テストと学習後テストである。⁹

⁹ ここでは2つの前置詞を取り上げたテストを紹介しているが、文法項目によっては、このように2つ以上の事項を比較させることで、学習の効果を上げることを狙う場合もあることに注意されたい。

Pre-test

- 前置詞 to と at 学習前小テスト
- 同 文中の空所に入れるべき前置詞を書きなさい。
- 1 彼はスーツに字跡を遺った。
- He sent a letter () Susan.
- 2 彼女は家に帰る途中に私の車を訪ねた。
- She called () my house on her way home.
- 3 それについてあまり言うべきことはありません。
- There is not much () it.
- 4 今日の午後2時半に会議があります。
- There's a meeting () 2:30 this afternoon.
- 5 エイミーはドアベルが鳴る音で目が覚めた。
- Amy woke up () the sound of her doorbell ringing.
- 6 私はこれらの本をそれぞれ1ドルで購入した。
- I bought these books () a dollar each.
- 7 驚いたことに、彼は勝利した。
- () my surprise, he won.
- 8 私はその少女を盗み見た。
- I stole a glance () the girl.
- 9 ダイアナは私の左側に立っている。
- Diana is standing () my left.
- 10 彼はテニスが下手だ。
- He is bad () playing tennis.

Post-test

- 前置詞 to と at 学習後小テスト
- 同 文中の空所に入れるべき前置詞を書きなさい。
- 1 あなたのドレスは私の趣味に合わない。
- Your dress isn't () my liking.
- 2 そのニュースを聞いて私は驚いた。
- I was surprised () the news.
- 3 彼はアラームの音で目が覚めた。
- He woke up () the alarm.
- 4 当社への電話番号は09-3295-6231 番へとどうぞ。
- You can reach us () 09-3295-6231.
- 5 彼女はゴルフが上手だ。
- She is good () playing golf.
- 6 彼はニューヨークへ行った。
- He went () New York.
- 7 当社ウェブサイトを www.tai-shu-jan.co.jp にお越しを。
- Visit our web site () www.tai-shu-jan.co.jp.
- 8 群衆は音楽に合わせて踊った。
- The crowd danced () music.
- 9 彼はロープをつかもうとしたが、つかみ損ねた。
- He caught () the rope but missed it.
- 10 彼ははどことなく冷たいところがある。
- There is a certain coldness () him.

図4 学習前テストと学習後テスト

4. おわりに

本稿では、2つのことを議論した。1つ目は、認知言語学の知見を活用した前置詞 *at* の意味論についてであり、2つ目は、その分析に基づく、前置詞 *at* の教材の持つ4つの利点についてである。第2節では、多義である *at* の語彙的意味は<特定>であり、一見すると *at* の意味であると考えられる各用法は、*at* が使用される文脈から派生的に出てきた用法であると主張した。こうすることで、英語学習者の負担の軽減にもつながることを主張した。さらに第3節では、第2節の考え方をベースに作成した *at* のモジュール型教材を紹介し、その教材の持つ利点を4つ指摘した。この教材の有効性についての検証を今後実施しなければならないが、我々の担当する授業の学生に対するアンケートの結果を見ると、その反応は肯定的なものが多いのは事実である。今後は、さらに取り扱う文法項目を増やし、英語学習者の英語力向上につなげていきたい。

参考文献

ⁱ Hill, L. A. (1969) Exercises on Prepositions and Adverbial Particles. London: Oxford U.P.

ⁱⁱ 小西 友七 (1976) 『英語の前置詞』 東京：大修館書店。

----- (1997) 『英語への旅路—文法・語法から辞書へ』 東京：大修館書店.

iii Herskovits, Annette (1986) *Language and Spatial Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.

iv Diven, Rene (1994) “Dividing up Physical and Mental Space into Conceptual Categories by Means of English.

v 小寺 茂明・小延 真生子 (2001) 「英語前置詞の語法研究」『大阪教育大学紀要 第V部門 第50巻』

vi 森山 智浩 編著 (2010) 『英語前置詞の概念』 愛知：ブイツーソリューション.

vii 田中茂範 (2011) 『英語のパワー基本語：前置詞・句動詞編』 東京：コスモピア.

viii 安藤 貞雄 (2012) 『英語の前置詞』 東京：開拓社.

ix Rauh, Gisa (1994) “On the Grammar of Lexical and Non-Lexical Prepositions in English “ in Cornelia.

x Hawkins, Bruce W. (1994) “On Universality and Variability in the Semantics of Spatial Adpositions” in Cornelia.

xi Linstromberg, Seith (1997) *English Prepositions Explained*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

xii Hanazaki, Miki and Kazuo Hanazaki (2008) “Semantics of Prepositions” ELSJ International Spring Forum.

xiii 花崎一夫・花崎美紀 (2009) 「日英語の語レベルにおける相同性をめぐって」『信州大学人文社会科学研究』3, pp.56-70.

加藤 鉦三・花崎 一夫・花崎 美紀 (2015) 「At の意味論」『英文学研究支部統合号 Vol.VII』 pp127-135.

[著者紹介]

花崎 一夫 (非会員)

1999年 東京大学人文社会系研究科博士課程英語学専攻 満期退学

1999-2005年 新潟薬科大学講師

2005-2006年 信州大学医学部保健学科助教授

2006-現在 信州大学全学教育機構准教授

2008-2009年, カリフォルニア大学バークレー校 客員研究員

現在, 認知言語学の知見を英語教育に応用することを実践するために, モジュール型教材の開発に力を入れている. 日本認知言語学会, 日本英語学会などに所属.

花崎 美紀 (非会員)

2002年 慶應義塾大学大学院博士課程修了 文学博士

2002-2007年 信州大学人文学部講師

2007-現在 信州大学人文学部准教授

2004-2005年, カリフォルニア大学バークレー校 客員研究員

現在, 認知言語学の枠組みで, 日英語の比較研究を主に行っている.

日本認知言語学会, 日本社会言語学会などに所属.

藤原 隆史 (非会員)

2003年 都留文科大学文学部英文学科卒

2003年-2004年 松南高校非常勤講師

2004年-現在 松商学園高等学校英語科教諭

2012年-現在 信州大学人文科学研究科修士課程在学中

現在, 認知言語学の英語教育への応用に関心を持ち, 鋭意研究中.

日本英文学会中部支部会員.